

長野県飯山市

勘介山古墳測量調査報告書

1994・10

長野県飯山市教育委員会

長野県飯山市

勘介山古墳測量調査報告書

1994・10

長野県飯山市教育委員会

例　　言

1. 本書は、長野県飯山市大字静間字勘助山に所在する勘介山古墳の保護対象の一環として飯山市教育委員会が実施した測量調査の報告書である。
2. 測量調査および報告書の作成は、飯山市教育委員会の依頼を受けた筑波大学歴史・人類学系考古学コースが担当した。
3. 測量調査は、筑波大学の考古学実習として1993年7月8日から7月13日にかけて実施した。
4. 本書の執筆は、I・Vを滝沢　誠が、II～IVを日高　慎が担当し、編集は滝沢と日高が共同して行った。
5. 本書に掲載した地図は、国土地理院発行1:25,000地形図飯山、替佐をもとに作成した。
6. 調査にあたっては、岩崎卓也氏（東京家政学院大学教授）から適切なご指導、ご助言をいただくとともに、下記の諸氏、諸機関から多人なご協力を賜った。記して謝意を表する次第である。（順不同、敬称略）
木船智二、丸山敏一郎、小池幸夫（長野県教育委員会）、土屋　穂（長野県埋蔵文化財センター）、前島　卓、飯島哲也（長野市教育委員会）
長野県教育委員会、飯山市秋津公民館
7. 調査関係者は以下の通りである。

- 飯山市関係　　高橋　桂（文化財保護審議会会长）
岩崎　彌（教育委員会教育長）
月岡久幸（教育委員会教育次長平成6年3月31日転出）
月岡保男（　　〃　　平成6年4月1日転入）
今清水豊治（教育委員会社会教育係長平成6年3月31日転出）
町井和夫（　　〃　　平成6年4月1日転入）
望月静雄（教育委員会社会教育係）
- 秋津地区関係　木舗　哉（秋津地区ふるさとづくり委員会会長）
徳竹豊治（秋津地区ふるさとづくり委員会文化・スポーツ部会長）
松澤芳宏（地元研究者）
高橋多喜治（秋津公民館長）
岸田文彦（秋津公民館主事）
- 筑波大学関係　西野　元（歴史・人類学系教授）
常木　晃（歴史・人類学系講師）
滝沢　誠（歴史・人類学系助手）
日高　慎、田中　裕（大学院生）、橋岡善丈、青柳佳子、見玉紀子、高橋政雄、山口　勝、後藤藤生、前田　修、大原亞希子、真木陽水（学群生）

目 次

例 言

I はじめに.....	(滝沢 誠)	1
II 立地と環境.....	(日高 慎)	2
III 測量調査.....	(日高 慎)	5
a. 調査の方法		
b. 調査の成果と墳丘の復原		
IV 考 察.....	(日高 慎)	11
V おわりに.....	(滝沢 誠)	18

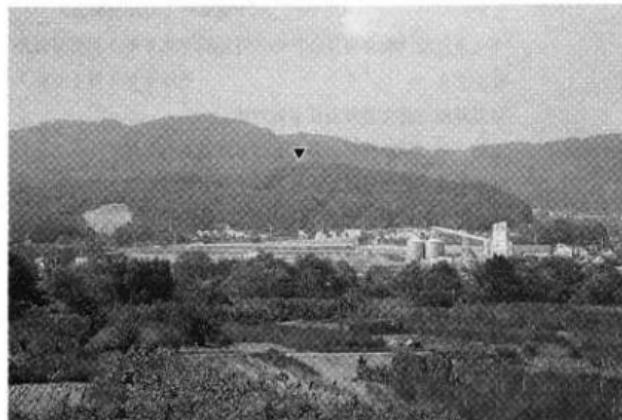


写真1 勘介山古墳遠景（東から）

I はじめに

勘介山古墳は、飯山市大字静間字勘助山に所在する前方後方墳である(第1図)。この古墳が前方後方墳として知られるようになったのはそれほど古いことではなく、1979年(昭和59年)に長野県史編纂事業の一環として松澤芳宏氏が測量調査を実施し、その成果を報告して以来のことである。⁽¹⁾またこのころ同氏らにより、飯山市有尾1号墳、中野市蟹沢古墳、同高遠山古墳も前方後方墳もしくはその可能性がある古墳として指摘され、善光寺平北部における古墳時代前半期の理解に大きな変更が迫られることとなった。更埴市森将軍塚古墳、長野市川柳将軍塚古墳など、善光寺平南部ではそれまでにも4世紀代の古墳が知られていたのに対し、善光寺平北部では從来4世紀代に遡りうる古墳の存在は知られていなかったからである。

こうした経緯をふまえ、1983年(昭和58年)3月10日、勘介山古墳は飯山市史跡に指定された。今回の測量調査は、地元・秋津地区ふるさとづくり委員会の要望もあり、県下でも有数の前方後方墳である勘介山古墳についてさらに十分な保護対策を講じるため、その基礎資料となりうる詳細な測量図の作成を目的として計画されたものである。

調査は飯山市教育委員会の依頼を受けた筑波大学歴史・人類学系考古学コースが担当することとなり、大学の考古学実習をかねて1993年7月9日から7月13日にかけて実施した。

なお、調査に先立つ7月4日、地元秋津地区の方々により古墳の下草刈りが行われたことは、調査の遂行にこのうえない大きな力となった。ここであらためて感謝の意を表明しておきたい。

註

- 1) 松澤芳宏「北信濃北半における前方後方墳の発見とその意義」『高井』52 1980。



第1図 勘介山古墳の位置 (1 : 2,500)
1. 法伝寺1・2号墳 2. 中町道跡 3. 田草川尻道跡
4. 勘介山古墳 5. 五里久保古墳群 6. 田上茶臼塚古墳群

II 立地と環境

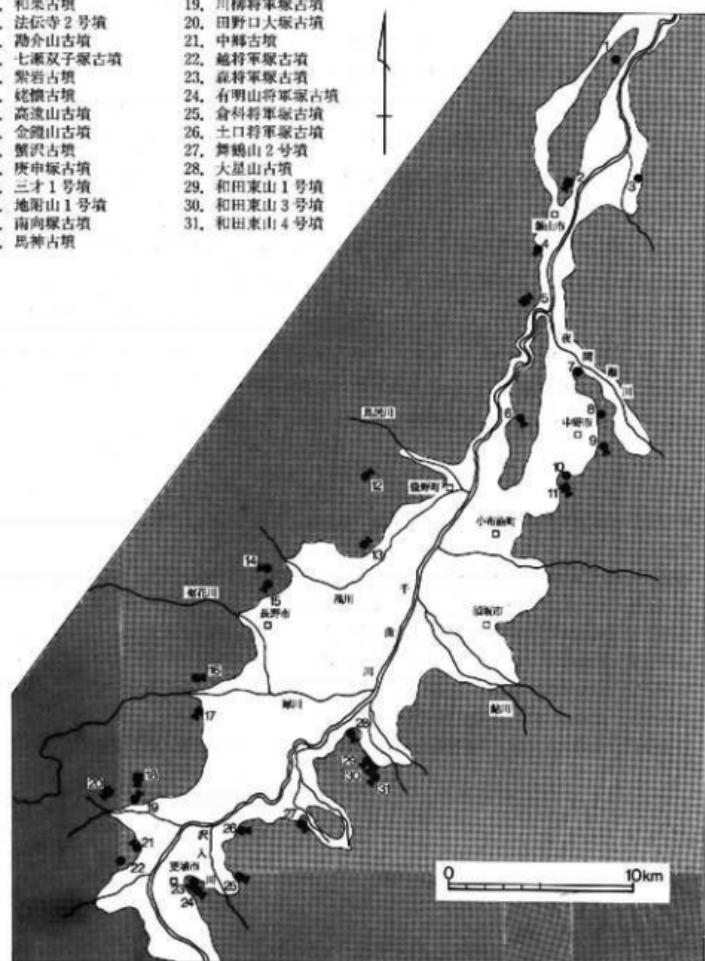
勘介山古墳の存在する飯山市は、新潟県に隣接した長野県でも最北端の地域であり、豪雪地帯としても名高いところである。この地域の丘陵は一般に分離丘陵と呼ばれ、大きく2回の断層がある。勘介山古墳の立地は、この断層によってできた丘陵の千曲川寄りの頂上であり、丘陵の西側には標高1381.8mを測る斑尾山、東には千曲川を隔てて標高1351.5mを測る高社山がそびえている。また、千曲川は勘介山古墳の南方で夜間瀬川と合流しており、周辺地域は肥沃な土壤が形成されている。丘陵自体は第四紀の初め頃に形成された、「屋敷層」と呼ばれる火山性の凝灰角礫岩や火山灰などで構成されたものであり、勘介山古墳は千曲川左岸の丘陵上の標高約440mに前方部を東に向けて存在する。

勘介山古墳の所在する善光寺平は、前期古墳が極めて濃密に分布する地域として、以前から注目されてきた。当地域の主要古墳は、そのすべてが千曲川を挟んだ両側にそびえる丘陵上に存在する(第2図)。ここでは主に善光寺平北部の主要古墳の様相について述べていく。勘介山古墳の北約6kmには、一辺約22mでやや短い前方部がつく全長約35mと推定される前方後方墳の有尾1号墳⁽¹⁾が存在している。前方部はほぼ南側の斜面に向いており、前方部はやや短く小さい印象を受けるが、後方部は墳丘の残りが傾めてよく、現状では方形を呈している。墳丘長も勘介山古墳と大差はないことから、同古墳との関係を解く上でも測量調査などの検討を行う必要があろう。

また、勘介山古墳と有尾1号墳のほぼ中間には、全長約25mの法伝寺2号墳⁽²⁾が存在している。同古墳は前方部を南西に向けた帆立貝形古墳であり、かつて墳頂部より長さ約40cmほどの鉄剣⁽³⁾が出土しているが、主体部の構造などは不明である。さらに、有尾1号墳の北方約4kmの長峰丘陵上には径32m、高さ5.5mを測る家裏古墳(大塚1号墳)⁽⁴⁾が存在し、隣接する大塚2号墳は方墳の可能性もあるという。勘介山古墳・有尾1号墳に続く有力な古墳として注目される。

これらの古墳から南方の中野市域には、全長61mを測る前方後円墳の七瀬双子塚古墳を始めとして、幾つかの有力古墳が存在する。高遠山古墳は中野平の東端に位置する全長約55mを測る前方後円(方)墳⁽⁵⁾である。丘陵から一段下がった尾根の先端に、後円(方)部を平野に向けて築造されている。同古墳は近年の採石工事により、前方部とそれに続く丘陵が分断され、さらに墳丘の西側までもが削りとられている。それは、墳丘にまでおよんでおり早急な保存処置の必要がある。後円(方)部の西側は比較的の残りがよく、やや直線的な印象を受けるが、正面はやや丸みをおびている。よって円とも方とも決し難く、墳形の決定は今後の調査に委ねたい。高遠山古墳の南方には、全長40mの前方後方墳である簾沢古墳⁽⁶⁾が存在する。西方に伸びる丘陵の先端に位置し、後方部を平野に向けて築造されており、くびれ部および前方部前端に葺石が確認されている。これら二古墳のほぼ中間には、径21mの円墳で珠文鏡、五鈴鏡、環鏡、貝輪など多数の副葬品を出土した金鏡山古墳⁽⁷⁾が存在する。中野平東縁の有力古墳が他に存しなこと、また主体部の構造が合

1. 家裏古墳(大塚1号墳) 17. 腹村1号墳
 2. 有尾1号墳 18. 短原古墳
 3. 和栗古墳 19. 川柳特軍塚古墳
 4. 法伝寺2号墳 20. 田野口大塚古墳
 5. 駄介山古墳 21. 中郷古墳
 6. 七瀬双子塚古墳 22. 越前軍塚古墳
 7. 紫岩古墳 23. 森特軍塚古墳
 8. 稲櫻古墳 24. 有明山特軍塚古墳
 9. 高遠山古墳 25. 倉利特軍塚古墳
 10. 金雞山古墳 26. 土口特軍塚古墳
 11. 蟹沢古墳 27. 舞鶴山2号墳
 12. 庚申塚古墳 28. 大星山古墳
 13. 三才1号墳 29. 和田東山1号墳
 14. 地附山1号墳 30. 和田東山3号墳
 15. 南向塚古墳 31. 和田東山4号墳
 16. 馬神古墳



第2図 善光寺平の主要古墳の分布

掌式の石棺であることなどからしても、金鎧山古墳の占める位置は極めて重要と思われる。

これらの古墳が所在する中野平東線から、中野市街を挟んだ西側の長丘丘陵には全長61mを測る前方後円墳の七瀬双子古墳⁽⁴⁾が存在する。前方部を南方に向けて築造されており、かつて後円部墳頂から出土した珠文鏡、短甲、鉄刀、鉄鋒、長頸鏡、須恵器、土師器などの遺物が知られるが、主体部の構造については不明である。また、同丘陵には林畔1号墳や山の神古墳など14基の古墳が存在しており、七瀬双子塚古墳から築造され始めた古墳群と考えられる。

善光寺平には上述の主要古墳のほかに、南部の長野市・更埴市を中心として16基の前方後円墳、3基の前方後方墳が存在する。前方後方墳の分布をみるとすべて千曲川左岸に限定される。右岸には信濃最大の前方後円墳である森將軍塚古墳が最南端に存在し、次いで倉科將軍塚古墳、土口將軍塚古墳が続く。左岸には全長93mという卓越した規模を誇る、前方後円墳の川柳將軍塚古墳が存在するが、埴輪棺や副葬品の様相から森將軍塚古墳に後続する前方後円古墳である。さらに、川柳將軍塚古墳の周囲には小規模な前方後方墳である姫塚古墳、田野口大塚古墳が存在しており、前述の森將軍塚古墳の位置する千曲川右岸の様相とは異なる発展段階を示すものと推察される。

以上のように善光寺平においては、千曲川左岸の飯山地域、夜間瀬川と千曲川に挟まれた中野地域、鳥居川以南の千曲川左岸の地域とその対岸に位置する千曲川右岸の地域、さらにその他の単発的に前方後円墳を築造した地域に分けることができよう。

註

- 1) 信州大学の赤羽貞幸氏の御教示による。赤羽氏には、現地において基本的な周辺地質のご説明を受けた。
- 2) 松澤芳宏氏に、後述の法伝寺2号墳とともに現地を案内していただき、種々のご教示を受けた。
- 3) 松澤芳宏「帆立貝式古墳の一例」『高井』36 1976。
- 4) 松澤芳宏「飯山・中野地方の前半期古墳文化と提起する諸問題」『信濃』35-3 1983。
- 5) 松澤芳宏・田中幸生「蟹沢古墳・高遠山古墳・姥懃古墳」『長野県史』考古資料編2 1982。
- 6) 松澤芳宏・田中幸生「蟹沢古墳・高遠山古墳・姥懃古墳」『長野県史』考古資料編2 1982。
- 7) 森本六郎「金鎧山古墳の研究」雄山閣 1926。
- 8) 岩崎長思「飯綱堂双子塚」『長野県史蹟名勝天然記念物調査報告』5 長野県 1926。

III 測量調査

a. 調査の方法

調査は、1993年7月9日から7月13日にかけて実施した。作図は開放トラバース測量によって基幹となる基準杭を11本設置し、基準杭より平板を用い縮尺を100分の1、等高線を25cm間隔で行った。測量原点Oは後方部の中心に設定し、主軸に沿って西にW1、東にE1、E2、E3の杭を設けた。原点Oから主軸に直交して南にS1、S2、北にN1の杭を設けた。E2は前方部墳頂部に設定した杭であり、E2から主軸に直交して南にE2S1、E2S2、北にE2N1を設けた。なお、方位は真北を、レベル高は海拔を表している。

以上の各測量基準杭の標高は、国道117号と田草川橋の交差する地点の道路補修工事に伴って設定された海拔322.327mの基準点から計測し、杭間の水平距離は光波測距儀で計測した。さらに、今回の成果が今後の活用に対応できるように、S2から主軸と平行して西に5.855mの位置にプラスチック杭A、東に5.418mの位置にプラスチック杭Bを設置し、この二本の杭のみ現地に残してある。なお、原図など今回の調査における成果は、筑波大学歴史・人類学系で管理・保管している。



写真2 勘介山古墳近景（南東から）

b. 調査の成果と墳丘の復原

測量調査の結果から、勘介山古墳の墳丘形態と規模について示す。

勘介山古墳は、通称勘介山の頂上である北東にのびる尾根上に位置し(第1図)、前方部を東北東に向かって築造された全長40.0mの前方後方墳である(第3図)。後方部の墳頂最高点の標高は海拔442.661mである。測量調査によって得られた本古墳の著しい特徴は、後方部と前方部の主軸が同一直線上にないことである。すなわち、後方部は墳丘南側の440.00mから442.00mの等高線の流れの方向から、N-65°-Eに主軸をもち、前方部は墳丘南側では438.50mから440.75m、墳丘北側では439.50mから442.00mまでの等高線の流れの方向から、N-73°-Eに主軸をもっている。つまり、前方部が後方部に対して、やや南に傾いていることになる。

さらに、墳丘の北側が南側に比較し、墳裾が極めて不明瞭となっていることがあげられ、特に後方部に顕著に認められる。しかし、後方部の441.50mの等高線にやや括れが存在し、傾斜変換線・墳裾線としてとらえることができ、それより下の等高線は自然地形へとつながっている。墳丘南側は、東南のコーナーが438.50から438.75mの等高線を墳裾ととらえることができる。南西のコーナーは明瞭ではないが、前方部東側の丘陵斜面から後方部の西側まで続く、道状の掘込みが屈曲する位置を採用して、439.50m前後を墳裾ととらえることができよう。墳丘西側は必ずしも明瞭ではないが、現状でやや傾斜が変換する部分と南西のコーナーを延長して、墳裾とすることができよう。後方部墳頂平坦面は、ほぼ442.00mの等高線を採用し、11.0×12.0mのやや主軸に横長の形態をとる。この墳頂平坦面の中心主軸ラインから南側の墳裾までの長さが15.0mであり、それを折り返して北側に復元してみると、前述の441.50m付近の傾斜変換線よりも外側の自然地形に墳裾ができてしまい、墳形は後方部が横長になる。しかし、主軸の左右で墳裾の位置を異にし非対称の形態をとることにより、後方部は26.0×26.0mのはば正方形のプランとなる。

後方部の高さは南北の墳裾の高さが異なり、南側では4.2m、北側では1.2mである。その差3.0mと極めて大きい比高差をもっている。南側は前述した道状の掘込みによって、さらに高さを感じる効果を備えている。

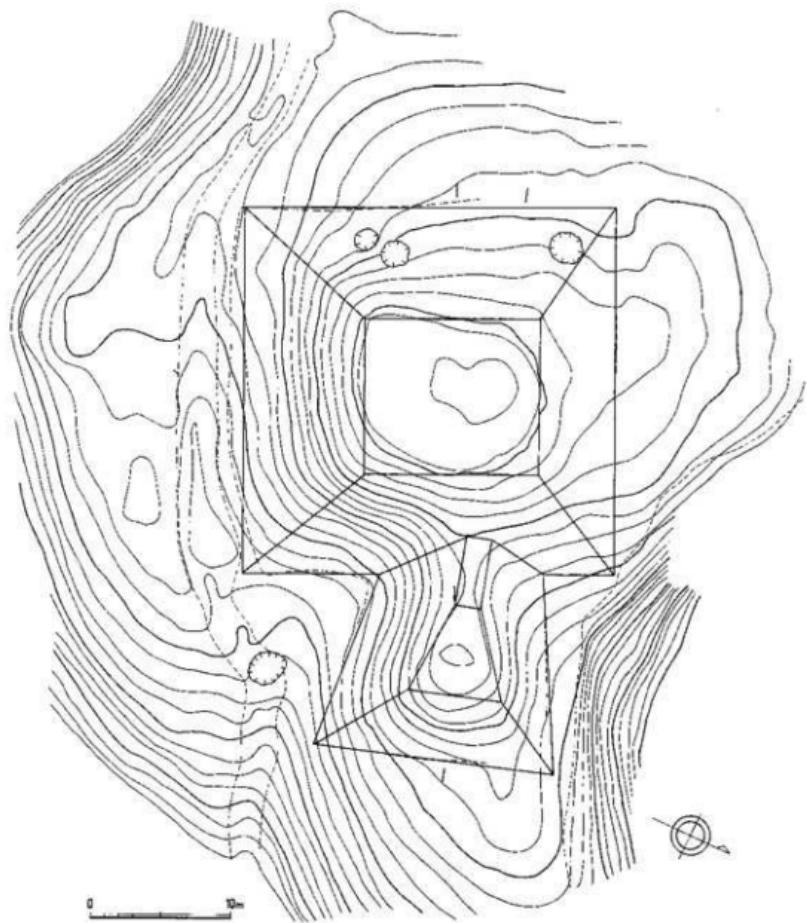
前方部は、墳丘南側で438.50mの等高線を、また北側では439.25から439.50mの等高線を、さらに前方部前端は439.50m前後を墳裾としてとらえることができる。この墳裾のラインは、前方部前端に向かって開いていくいわゆるバチ形の形態は取らず、極めて直線的に開いていくものである。前端部の幅は17.0mである。前方部の墳頂部は、440.75mの等高線が平坦面として認定でき、西側幅が2.0m、東側幅が6.5m、主軸方向の長さが6.5mとなる。これに幅2.0m、長さ5.0mの細いテラスが後方部に向かってのびている。前方部も後方部と同様に、墳丘南側のほうがやや幅を広くとる形態をもつ。くびれ部の幅は墳裾で11.5mである。

前方部の高さは南側で2.4m、北側で1.7m、前端部の東側で1.6mを測る。前方部と後方部の墳頂での比高差は約1.7mである。

現状で葺石や埴輪、土器などの墳丘外表施設は確認できず、ボーリングステッキによる調査に



第3図 喬介山占墳測量図 ($S = 1/300$)



第4図 塗化復原案 ($S = 1/400$)

おいても、その徵候は認められなかった。また、墳丘南側に存在する道状の掘込みの外側に墳丘状の高まりが存在するが、当古墳に伴うものであるかは不明である。埋葬主体の構造に関しては、後方部墳頂においてボーリングステッキによる調査を試みたが、石材などを確認することができないことから、竪穴式石室ではなく木棺直葬などの可能性が高い。

以上の測量調査の所見をもとにして勘介山古墳の墳丘を復原した結果は、第4図である。以下に、勘介山古墳の諸特徴（数値）を再掲しておく。

全 長	40.0m	後 方 部 高	4.2m (南から)
後 方 部 長	26.0×26.0m	" "	1.2m (北から)
後方部墳頂部長	11.0×12.0m	前 方 部 高	2.4m (南から)
前 方 部 長	14.0m	" "	1.7m (北から)
前方部前端部幅	17.0m	前方部後方部比高	1.7m
く び れ 部 幅	11.5m	後方部最高点標高	442.66m

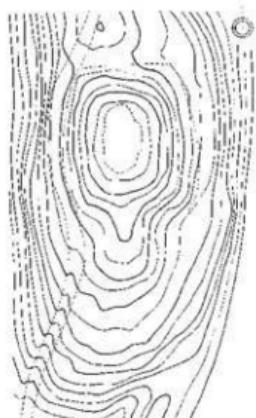
IV 考 察

測量調査によって判明した勘介山古墳の特徴には、以下の二点がある。1) 後方部と前方部の主軸が同一直線上にない。2) 左右の墳丘が非対称であり、墳丘の南側を意識した造りである。1)に関しては、墳丘の乗っている丘陵が、前方部側に細くなっていく地形であるということに大きく左右されているといえる。また、くびれ部の角度と南東方向のコーナー部を、主軸方向の相違によって際立たせる効果を狙ったともいえよう。これは勘介山古墳が前方後方墳あるということと同時に、墳丘の南側を極めて意識した結果である。2)に関しては、上述の墳丘南側の重要な視によってもたらされた結果であろう。つまり、勘介山古墳は墳丘の南側を正面として、北側はそれほど重要視していないのである。このように考えると、前方部東側の丘陵斜面から後方部の西側まで続く道状の掘込みも、後世の掘削によるものと解することもできるが、当時の勘介山古墳に至る道あるいは周溝という考えも捨て切れない。それは、当古墳の墳形を明確に把握でき、かつ大きさを実感できるのは、前方部の東側から望むのが最も有効だからである。

この墳丘南側を正面とする理由として、千曲川の沖積地あるいは中小河川の扇状地に想定される集落を対象にして築造されたことがあげられる。勘介山古墳の北側を東西に流れる田草川の扇状地端部には、縄文時代から中世に亘って断続的に集落が営まれた田草川尻遺跡⁽¹⁾が存在する。現在までの継続的な発掘調査では、勘介山古墳に並行する時期（後述）の遺構や遺物は確認されていないが、今後古墳時代前期に遡る集落が発見される可能性は高い。

勘介山古墳の築造年代については、埋葬主体部の構造が不詳であり、出土遺物も確認できない現状ではその詳細な位置付けは難しい。しかし、古墳の立地する標高440m前後という高さは、下曲川の流れる平坦部からの比高差80~100mであり、極めて高所に築造されているといえよう。また、墳形が前方後方形で前方部幅が後方部幅を凌駕するものではなく、長さも中・後期の前方後方（円）墳の場合はさらに長大であるという事実とを考え合わせると、本古墳は古墳時代前期の範疇に含めて大過ない。

長野県における古墳出現の様相については、各地域においてまず中・小規模の前方後方墳が出現し、その後規模を拡大した前方後円墳が成立・発展していく。長野県の前方後方墳は、現在まで10基が確認されている。この内、佐久市瀧の峯1・2号墳⁽²⁾は全長18mの前方後方形の低墳丘墓であり、墳丘形態からは長野市鹽川堤防地点S D Z - 3などの近年発見が相次いでいる前方後方形周溝墓や、長野市北平1号墳などの尾根上に築かれた低墳丘墓との関連も想定できよう。これらを除くと松本市弘法山古墳が全長63mであり、中野市高遠山古墳が55mである。後者はやや直線的な部分も存在するが、全体に丸みを帯びており前方後円墳の可能性も多い。これらを除いた6基の古墳は、すべて全長40m前後という同規模の前方後方墳である。この内、勘介山古墳、中野市蟹沢古墳⁽³⁾、長野市越塚古墳⁽⁴⁾、飯田市狐塚古墳⁽⁵⁾（以上第5図）は、正方形の後方部と直線的に



1 長野市黒原古墳



2 中野市篠沢古墳



3 飯田市黒塚古墳



4 貝山市勘介山古墳

第5図 長野県における類似性の高い前方後方墳 ($S = 1/800$)

0 20m

開く前方部を付設する形態において共通性が見出せる。有尾1号墳は現状を観察する限り、やや前方部が短い様相を呈しており、長野市出野口人塚古墳に関しては、造出し状の前方部が付設する形態であり、上記の4基の古墳と比べてやや時期の下るものである可能性が高い。

つまり、少なくとも善光寺平の中では、立地と環境の部分で述べたように前方後方墳の分布する千曲川左岸の飯山地域、夜間瀬川と千曲川に挟まれた中野地域、烏居川以南の千曲川左岸の地域に同規模・同形態の前方後方墳が存在する。この事実はその同時期性を示していると共に、同様な出現過程を経たものである蓋然性が極めて高いといえよう。すなわち、飯田市狐塚古墳を含めたすべての古墳は、その地域における最初の前方後方墳に先行する前方後方墳といえるのである。

それでは、これらの前方後方墳は、その出現に際しどのような政治的・社会的背景が存在していたのだろうか。かつて一志茂樹氏は善光寺平をその中心とする北信濃の地域は、文献に散見される尾張→美濃→信濃→越のルート、または甲斐→信濃→三越→人和のルートなどいずれも越に至る玄関口であるという記述から、北信地域と北陸地域との文化的な交流の存在を想定した。さらに松澤芳宏氏は当地域の古墳時代初期の段階で、集落遺跡から出土する土器の様相をも含め、北陸の影響を考慮した。また、これらの諸説をうける形で、甘粕健氏は山谷古墳の調査結果をもとに、同古墳が所在する蒲原地方が加賀・越中を経由する日本海の海路による古墳文化伝播の終着点であるとともに東北南部（会津地方）および中部山岳地帯への内陸ルートの起点となった可能性を指摘している。

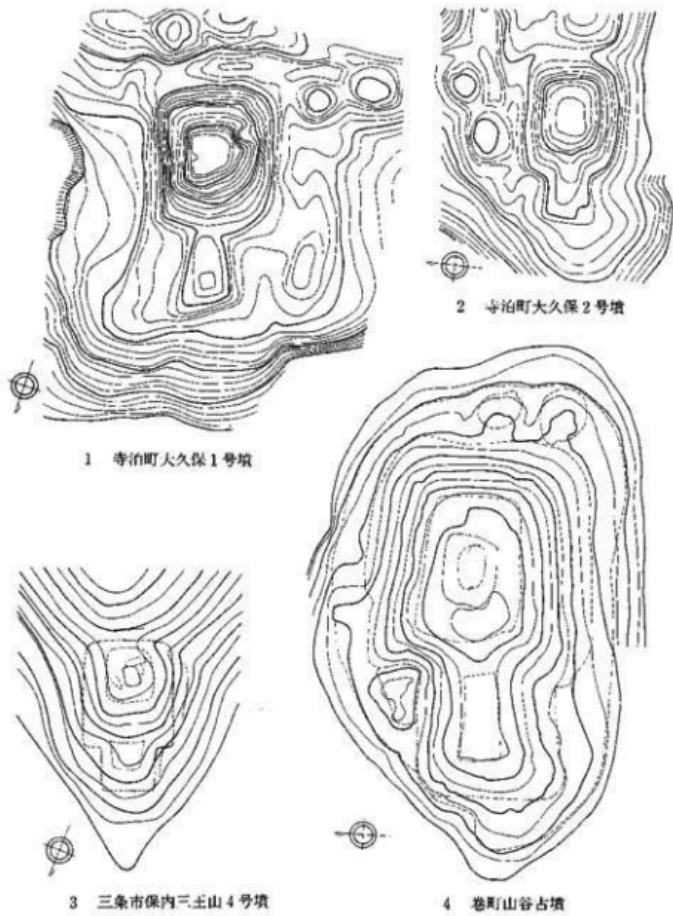
近年長野県における北陸系土器の流入に関して、発掘資料が増加してきている。これらの北陸系土器を整理した前島卓氏は、北陸地方の影響が在来系土器の中に一部要素として採用されていた結果、そのものを変質解体させていく一端を担った可能性を指摘している。また、飯山市上野遺跡におけるH9号住居址や長野市小島境遺跡などには在来の要素を見出す余地ではなく、むしろ北陸地方の人々が直接に移住してきた結果である可能性を指摘している。上野遺跡から南方約5kmの地点には有尾1号墳が所在し、さらに6km南には勘介山古墳が所在する。飯山地域の古墳出現期を考える場合、北陸地方との関わりを千曲川～信濃川のルートを含め再検討する必要がある。

このルートに乗る、新潟県信濃川下流域における古墳出現期の状況はどの様なものであったのか。信濃川河口に広がる新潟平野における有力古墳は、前方後方墳が3基、前方後方墳が4(5)基、大型円墳が2基である。当該地域における有力古墳の分布をみると、大きく分けて三地域の設定が可能と考えられる。すなわち卷町菖蒲塚古墳の所在する地域、三条市保内三王山1号墳の所在する地域、新津市占津八幡山古墳である。さらに寺泊町には近年その存在が確認された、前方後方墳の大久保1・2号墳の所在する地域、見附市山崎1号墳、などの小地域が設定できる(第6図)。この中で卷町山谷古墳、三条市保内三王山4号墳、寺泊町大久保1・2号墳(以上第7図)が前方後方墳である。

1. 諸立八幡神社古墳
2. 高瀬塚古墳
3. 山谷古墳
4. 綾音山古墳
5. 稲場塚古墳
6. 大久保1号墳
7. 大久保2号墳
8. 麻生田1号墳
9. 山崎1号墳
10. 保内三王山1号墳
11. 保内三王山4号墳
12. 保内三王山11号墳
13. 古津八幡山古墳



第6図 新潟平野の主要古墳の分布



0 10m

第7図 新潟平野の前方後方墳 ($S = 1/600$)

山谷古墳は全長38mであり、埋葬施設は墓壙をもつ木棺直葬である。古墳の正面と考えられる南側の後方部が後方部幅より約2.5m長く、やや縦長の形態をとるものである。さらに墳丘の南側を意識してテラスを配置するなど、墳丘形態の上で勘介山古墳との相違が指摘できる。しかし、山谷古墳の墳丘東側には、後方部区画溝を介して小マウンドが2基存在しており、勘介山古墳にも同様の小マウンドが墳丘南側に1基存在する。山谷古墳のにおける小マウンドの調査結果からは埋葬施設などの痕跡は確認できなかったが、報告者の甘船健氏は「埋葬の有無に関わらず、亡き首長に対する側近の奉仕を象徴する陪冢的な施設」との見解を示している。この種の造構が、主墳に対する陪冢的な埋葬に伴うという意味を有していたならば、勘介山古墳における小マウンドも同様なものである可能性も存在し、さらに上述した道状の掘込みも築造当初からの所産といふことができよう。

保内三王山4号墳は全長16mの小規模古墳であるが、方墳に造出しきの前方部を付設する。埋葬施設は墓壙のプラン確認のみであり、詳細は不明である。墳丘形態に勘介山古墳との類似性は確認できないが、保内三王山古墳群における最初の古墳であり、その形が前方後方墳であることは注目に値する。

大久保1・2号墳は近年その存在が知られるようになった前方後方墳であるが、1号墳の全長が24m、2号墳が17mである。両古墳とも後方部がやや縦長の形態であり、1号墳の前方部はやや細長くあまり開かない。2号墳は短かい前方部を付設する形態であり、保内三王山4号墳に規模・墳形とも近似する。さらに、同古墳群には3基の方墳が存在している。方形を志向した古墳群であり、蒲原地域では特異な存在といえる。1号墳における縦長の前方部は、左右の開き方に相違が認められる。それは、ちょうど山谷古墳の左右を逆転させたような形態であり、後方部が縦長になることからも同古墳との密接な関係を示すと考えられる。1・2号墳とともに、墳丘形態において勘介山古墳との類似性を指摘することは難しい。

上記のように、墳形において同一水系にある兩地域を積極的に関連付ける要素は抽出できなかった。しかし、山谷古墳における周溝と小マウンドの関係が勘介山古墳にも認められるという事実は、積極的ではないにしろ、相互の関係を解明する上で極めて重要である。また、山谷古墳の埋葬施設が木棺直葬であるという事実は、長野県における前期古墳のほとんどが堅穴式石室を採用していることから、勘介山古墳と北陸の古墳との関連性を示すものかもしれない。さらに、勘介山古墳→有尾1号墳という前方後方墳を連続して築造するという特徴は、守泊町大久保1号墳・2号墳に通じる特徴であり、その後に前方後方墳を築造しないことも兩地域における関連性を指摘できるかもしれない。

いずれにせよ、長野県内の前方後方墳だけを取り出してみても、その情報は極めて少量であり、相互の関係や他地域との交流を具体的に考察するためには、なお多くの資料の蓄積が必要である。今後比較・検討できる資料が揃った段階で、再度検討を加えることを約束し、まとめと考察に代えたい。

註

- 1) 高橋桂ほか『田草川尻遺跡Ⅰ～VII』飯山市教育委員会 1973～1992。
- 2) 三石宗一ほか『長野県佐久市龍の峯古墳群発掘調査報告書』佐久市教育委員会 1987。
- 3) 青木和明ほか『篠ノ井遺跡群（4）—聖川堤防地点—』長野市教育委員会 1992。
- 4) 青木・男「北平1号墳・瀧ノ峯1・2号墳」『長野県考古学会誌』－古墳時代特集号－69・70 1993。
- 5) 斎藤忠ほか『弘法山古墳』松本市教育委員会 1978。
- 6) 松澤芳宏・田川幸生『蟹沢古墳・高遠山古墳・姥懐古墳』『長野県史』考古資料編全1巻（2）主要遺跡（北・東信）長野県史刊行会 1982。
- 7) 前掲註6文献。
- 8) 岩崎卓也『川柳将軍塚古墳・鄭塚古墳』『長野県史』考古資料編全1巻（2）主要遺跡（北・東信）長野県史刊行会 1982。
- 9) 田中裕・早野浩二『長野県飯田市代田山狐塚古墳の測量調査』『筑波大学先史学・考古学研究』5 1994。
- 10) 松澤芳宏「有尾古墳群・勘介山古墳」『長野県史』考古資料編全1巻（2）主要遺跡（北・東信）長野県史刊行会 1982。
- 11) 山田昌久ほか『長野市田野口大塚古墳の測量調査』『信濃』39-4 1987。
- 12) 一志茂樹『信濃と越とを結ぶ古代の幹路』『信濃』15-10 1963。
- 13) 松澤芳宏「北信濃北半における前方後方墳の発見とその意義」『高井』52 1980。
- 14) 甘粕健「前方後方墳の分布と越後における古墳発生に関する予察」「越佐の歴史と文化－宮榮二先生古稀記念集－」宮榮二古稀記念刊行会 1985。
- 15) 前島卓「北陸系土器の動向」『長野県考古学会誌』－古墳時代特集号－69・70 1993。
- 16) 望月静雄ほか『小沼湯滻バイパス関係遺跡発掘調査報告』飯山市教育委員会 1990。
- 17) 前掲註15文献。
- 18) 新津市八幡山遺跡から前方後方形周溝墓の存在が指摘されている。広井造「古津八幡山古墳と八幡山遺跡前方後方形周溝墓について」『古津八幡山古墳』新津市教育委員会 1992。
- 19) 甘粕健「古墳文化の形成－四 萬葉塚古墳と北限の古墳文化」『新潟県史』通史編I・原始古代 新潟県 1986。
- 20) 甘粕健ほか『保内三王山古墳群』三条市教育委員会 1989。
- 21) 川村浩司ほか『古津八幡山古墳』新津市教育委員会 1992。
- 22) 寺村光晴「大久保古墳群」『守泊町史』資料編I 守泊町 1991。
- 23) 甘粕健ほか「越後山谷古墳」卷町教育委員会・新潟大学考古学研究室 1993。
- 24) 前掲註23文献。
- 25) 前掲註20文献。
- 26) 甘粕健「VII章 総括」『越後山谷古墳』卷町教育委員会・新潟大学考古学研究室 1993。
- 27) 前掲註9文献において狐塚古墳が竪穴式石室である可能性が指摘されている。

V おわりに

今回の勘介山古墳の測量調査は、遺跡保護対策の一環として実施した基礎調査であり、その意味では以上の報告により当初の目的は達せられたものと思う。また、その調査成果から考えられる勘介山古墳の築造年代、出現の背景については、IV考察に述べられた通りであり、依然残された問題も多い。そうした勘介山古墳自体の問題とともに、善光寺平北部における首長系譜の追求も残された大きな課題である。

善光寺平北部では、飯山地域の勘介山古墳、有尾1号墳、中野（東部）地域の蟹沢古墳が前方後方墳として知られ、それぞれ飯山、中野両地域における4世紀代の首長墳と考えられる。また、前方後円墳もしくは前方後方墳として知られる中野市高遠山古墳は、未発達な前方部の形状から遅くとも5世紀初頭までの築造と想定され、現状では蟹沢古墳に後続する中野（東部）地域の首長墳と見ておいてよい。つまり善光寺平北部では、飯山、中野両地域で4世紀代にそれぞれ首長墳が出現し、場合によっては二世代にわたる首長系譜が考えられるのであるが、その後は5世紀中葉頃の前方後円墳と考えられる中野市七瀬双子塚古墳が蟹沢・高遠山両古墳とは盆地を挟んだ丘陵上に築かれるだけで、明確な首長墳の築造が認められない。おそらく5世紀初頭以後の首長墳は、飯山地域では法伝寺2号墳、中野（東部）地域では姥塚古墳といった帆立貝形古墳や円墳なのであろうが、こうした古墳の実態についてはなお不明な点が多い。善光寺平北部における古墳時代の政治動向を把握するうえからも、今後は前方後円（方）墳以外の古墳にも焦点を定めた基礎調査をさらに進めていく必要があるだろう。

今回の測量調査にあたっては、その環境づくりに地元秋津地区の方々が大きな役割を果たされた。調査期間中には「勘介山古墳を考える」と題した地元主催の検討会が開かれ、調査担当者との間でさまざまな意見交換が行われた。貴重な歴史的遺産とともに歴史を語る場として伝えていく、その尊重すべき取り組みに今回の調査が少しでも役立つことを願うばかりである。

飯山市埋蔵文化財調査報告・第41集
勘介山古墳測量調査報告書

編集 滝沢 誠・日高 健
発行 長野県飯山市教育委員会
平成6年10月31日
印刷 ほおづき書籍

